ひょうご人権ジャーナル

ひろげよう こころのネットワーク

きずな

KIZUNA

2016
平成28年
1

特集テーマ

つながりづくり

緩やかなつながり

2 巻頭言「多様な縁で支え合う社会をめざして」
井戸 敏三（兵庫県知事）

3 のじぎく文芸賞 創作童話部門 優秀賞（学齢の部）「百てん」
名田 栞さん（姫路市立安室東小学校 5年）

4 「ピカピカしたコミュニティ」
鳥越 皓之さん（大手前大学 副学長）

5 「震災から学ぶ ～家族、人、地域とのつながり～」
宮定 章さん（認定特定非営利活動法人 まち・コミュニケーション 代表理事）

6 「住民主体のまちづくり」
西内 勝太郎さん（北須磨団地自治会 会長）

7 「かかわらなければ」
沢 知恵さん（シンガーソングライター）

8 情報ぷらざ

兵庫県マスコット はばタン

兵庫県・（公財）兵庫県人権啓発協会

巻頭言

「多様な縁で支え合う社会をめざして」

兵庫県知事
（公益財団法人兵庫県人権啓発協会 会長）
井戸敏三

わが国は急速な少子高齢化の進展とともに、本格的な人口減少社会の到来を迎えています。兵庫県の人口も、２００９年の５６０万人超えをピークに減少に転じました。２０１５年の国勢調査の結果を待たなければなりませんが、２０１５年は５５２万人台となるはずです。毎年1万人以上の人口減となっています。しかも、阪神・淡路大震災から20年を経て、ポスト震災20年を迎え、震災復旧復興後の兵庫づくりの時代となっています。それだけに、安全安心の確保が県政推進の第一義とされねばなりません。

その元気で安全安心な地域づくりの基本は、人や地域の絆です。兵庫は、阪神・淡路大震災を経験し、被災者をはじめ、ボランティアや内外からの支援者も一体となって創造的復興の歩みを続けてきました。私たちが学んだ、人々の絆や地域のつながりの大切さ。今こそ、震災を乗り越えてきた兵庫の知恵と力を再結集し、ポスト震災20年の新しい地域づくりをめざすときです。人々が互いを尊重し、支え合いながら、いきいきと活躍できる社会を実現していかなければなりません。

とりわけ、近年、心の拠り所である家族や地域、職場でのつながりが希薄化し、コミュニティ機能の低下が懸念されています。モノは豊かになり、便利になる一方で、価値観やライフスタイルの多様化、都市化や核家族化などを背景に、かえって「無縁社会」と言われる状況が生まれ、結果的に、いじめや、児童虐待、自殺、高齢者の孤立死などといった人権にかかわる事件につながるケースも少なくありません。

これらは事件となって初めて顕在化することが多く、未然に防止するためには、地域の身近な人々が積極的に関わっていくことが大切なのではないでしょうか。他人に頼らないことや関わりを持たないことが個人の自立ではありません。人々の孤立が生まれないように、困ったときには、「助けて」と言えるつながりや居場所をつくる必要があります。

そのためには、一人ひとりが、社会の中で支え合うという価値観を持ち、地域の様々な活動から生まれる日常的なつながりを構築していこうとすることが大切です。多様な縁でつながり合う重層的なネットワークを築いてこそ、孤独な人を生まない社会が創られるのです。

地域づくりの主役は県民一人ひとり。ともに力を合わせ、絆によって支え合い、将来に夢や希望が広がる「元気で安全安心なふるさと兵庫」の実現をめざし取り組んでいきましょう。

本年もどうぞよろしくお願いします。

のじぎく文芸賞 創作童話部門 優秀賞（学齢の部）

姫路市立
安室東小学校５年 名田 栞（なだ しおり）さん

「百てん」

ある日、私は生まれて初めてテストで百点をとりました。けれど、ある問題の一つがまちがえていたのです。きっとたんにんの原先生は、気づかずテストを返したのでしょう。これは、とても良い事。誰にも言わないよう自分の口に願いをこめて言いました。

「クチ君、クチ君、このテストのことは誰にもないしょだよ。もし周りの人達に言ったらクチ君、君のせいだからね。」

私は、くちびるを少しつねってからテストを引き出しにしまいこみました。

それから数か月後、私の弟が産まれました。弟は一年生になると、私のようにテストをしてみたい！と、いつも言っていました。その日、弟はこう言いました。

「今日、初めてテストが返されたんだけど、一問まちがえてたのに先生が丸してたんだ。だから、その事を言って直してもらったんだ。」

その時、ふと私は思い出しました。ずっーと前のテストの日のことを。

のじぎく文芸賞 作品集講評より

原稿用紙たった一枚の作品です。文字にして四百字。けれど、その短いマス目の中に、作者の思いが書きこまれ、それが読者にストレートに届きました。テストでちょっとズルをした主人公が、弟に教えられたこと、それは自分の心に嘘をつかないことでした。嘘は、いつまでもその人の心の奥深くに棲みついて、後悔という傷を残します。短いけれどズシリと心に残る作品でした。

詩人・児童文学者、のじぎく文芸賞審査委員　尾崎美紀

少子高齢化や東京一極集中が進む現在、「地域創生の推進」が県の政策として取り組まれています。一方、児童虐待や自殺、高齢者の孤立死など、課題を抱える個人や家庭が地域から社会的に孤立し、助けが得られないまま痛ましい事件となる現象が社会問題となっています。
本号では、皆が緩やかにつながりあって、幸せに暮らすことのできる地域づくりについて考えてみましょう。

ピカピカしたコミュニティ

大手前大学 副学長
鳥越 皓之（とりごえ ひろゆき）さん

社会的に孤立してしまう

だれであっても孤立することはつらいことです。とりわけ問題となるのは、弱者といわれる方々の社会的孤立です。子どもたちや高齢者の孤立が社会問題化している現在の状況は私たちの今後の「社会づくり」に投げかけられた大きな課題の一つと言ってよいと思います。兵庫県下でも、行政の熱心な努力にもかかわらず、子どもたち、高齢者、外国人の孤立がみられます。

けれども、兵庫県はどの市町でもコミュニティが比較的しっかりしています。県下でも鍵っ子が一時期問題になった地域もありましたが、今、そこでは世代間交流ということで、学校が終わると子どもたちが集まってきて、おじいさんおばあさん世代の人が見守る中で、遊んだり勉強したりしています。高齢者の孤立については、兵庫県では県民運動として「声かけ運動」をしてきました。

沖縄県竹富島のコミュニティ

それでもまだ充分ではありません。うらやましい地域があります。沖縄県竹富島。そこの集落は白砂の道の掃除も行き届いて、赤レンガの屋根と珊瑚の石垣がとても美しいので有名なところです。そこでは三つの世代がいつも集まってにぎやかに騒いでいます。なにかコミュニティ活動がピカピカしているのです。持ち寄ったものを食べたりみんなで踊ったりしています。お祭りなどの行事が多いことがその理由かもしれません。踊りの練習も神さまに献（ささ）げるものですから真剣です。

小学校の運動会では、小学生も頑張っていますが、三世代が総出の大きなイベントです。このような地域では世代を越えて、お互いがその名前をよく知っています。校長先生は子どもたちが生き生きしているだけではなくて、絵やスポーツが盛んで、勉強の成績もよいと自慢げに私に話してくれました。私はその自慢話をとてもうれしい気持ちで聞きました。私たちもピカピカしたコミュニティをつくりたいな、と思います。どうしたら「ピカピカしたコミュニティ」がつくれるのか、お互いに知恵を出し合いませんか。

プロフィール

1944（昭和19）年、沖縄生まれ。東京教育大学文学部（民俗学）卒。同大学大学院文学研究科（社会学）専攻修了。コミュニティ政策に関わり、地域の計画作成に参与。兵庫県の県民運動「声かけ運動」の立ち上げにも協力した。代表的な著書として『地域自治会の研究』『サザエさん的コミュニティの法則』などがある。関西学院大学教授、筑波大学教授、早稲田大学教授を経て、現職。早稲田大学名誉教授、兵庫県県民生活審議会会長を兼ねる。

震災から学ぶ
～家族、人、地域とのつながり～

認定特定非営利活動法人
まち・コミュニケーション
代表理事
宮定（みやさだ） 章（あきら）さん

私たちは、21年前の阪神・淡路大震災のことを学びに神戸市長田区御蔵（みくら）地区へ来られる多くの中学生を受け入れています。そこで、彼らに伝えるのは、まずは「自分の命を守る」ことです。21年前の大震災では、6，434名が亡くなられ、その約8割の方が建物等の下敷きによるものでした。自分の命が助かってこそ、人を助ける側に回れます。まずは、「自助」が大事であることを伝えています。

自分が助かってこそ、自分たちの家族や近所の方を助けることもできました。助かった方の7割は、近所の方に助けられました。災害では多くの方が被災しますので、すぐに救出の専門家（自衛隊や消防士等）が来てくれることはありませんし、助ける側の人員が不足します。そのために、近所の助け合いが大事になります。長田区御蔵地区では、火災の被害が大きく、助けられる時間も長くはありませんでした。埋もれている人の温かい手を握りながら、声を聞きながら、火が回ってきてしまい、助けられなかった命があること、近所づきあいがなく近所に知られず亡くなっている人がいること等、21年を経た今でも助けられなかった悔しさを抱え、暮らしている方もおられます。

一人でも多くの命を救うために学んだことは、

① 家の耐震補強と家具転倒防止
② 隣近所の人と知り合いになる大切さ
③ 隣近所の人と連携した防災訓練の大切さ

です。

阪神・淡路大震災は早朝に起きましたが、東日本大震災は、お昼過ぎで家族がバラバラになっている時間帯でもありました。災害はいつ起こるかわかりません。どのように対応するかは、隣人関係、学校や地域の日頃の準備が試されます。

震災から21年。教訓の風化が進み、阪神・淡路大震災の未経験者が、多くなりました。まだ起きてないことに対応するためには考えたり想像したりすることが大切です。人と防災未来センターに行くといろいろな資料に出会えますし、近くの経験者にお話を聞くのも良いでしょう。南海トラフ地震も起こると言われています。気持ちを引き締めて備えましょう。

プロフィール

1975（昭和50）年、西宮生まれ。工学博士（神戸大学）。火災で大部分が延焼した神戸市長田区御蔵地区に事務所を置く「まち・コミ」に2000（平成12）年に参加し、2003（平成15）年より代表理事。神戸にて、阪神・淡路大震災からの復興まちづくり支援や震災学習受入等を継続し、神戸大学にて、調査・研究活動も行った。東日本大震災の被災地でも経験を活かしながら、現地に滞在し、復興まちづくり支援を行う。2003（平成15）年に防災功労者内閣総理大臣賞受賞。

住民主体のまちづくり

北須磨団地自治会 会長
西内（にしうち） 勝太郎（かつたろう）さん

1967（昭和42）年に入居が始まった北須磨団地には、現在、約2,700世帯が暮らしています。高齢化率が47％になりましたが、住民の総数は近年増加傾向にあるといいます。北須磨団地自治会は、子どもも大人も安心して豊かに暮らせるまちづくりを進めています。

あいさつ運動でつながりづくり

1997（平成9）年に、北須磨団地では痛ましい児童殺傷事件が発生しました。そこで、犯罪を未然に防ぎ、暗いイメージを払拭するためにあいさつ運動を開始。犯罪件数は減少し、その効果は全国的に知られるようになりました。「気軽に声を掛け合うことで、顔の見える関係ができて、それが安心して暮らせる基盤になる」と自治会長の西内勝太郎さん。「あいさつするのはタダやから」とにやり。特に、小学生にこそ習慣づけてほしいと話します。児童へのかかわりとしては、見守り活動のほか、子どもたちへの出前授業も行っています。あいさつを通して、コミュニケーション力をつけた子どもたちが、将来の北須磨団地を支えてくれると期待しています。

ボランティアが支えるまち

自治会では、趣味や世代を越えて人がつながることができるように、学習会や運動会、防災カーニバルなど多くのイベントを実施しています。運営に携わるのはすべてボランティア。北須磨団地では、街の美化や公園の整備など、いたるところにボランティアの活躍が見られます。住民が運営している喫茶「しゃべりーな」で働くボランティアの女性は、「人が集まるこの場所が好き、充実した時間を過ごしている」と話します。「自分たちのまちが好きだと思えば、ごみも出さないし、まちのために活動できる」と西内会長。

2015（平成27）年4月には、住民らが団地に隣接する雑木林を切り開いて約600メートルの遊歩道を完成させました。竹製の手すりやベンチも設置され、近場で森林浴を楽しめると住民に好評です。ほかにもサツマイモ農園やシイタケ畑なども運営し、収穫時期には多くの住民が訪れます。

これまでに自治会と地域住民が一体となって、幼稚園と保育所を一緒にした保育センターや高齢者施設、障害者施設の設置を実現してきました。今後も誰もが住みよいまちづくりのための、取り組みが広がります。

北須磨団地自治会館
（住所）神戸市須磨区友が丘7丁目275
（電話）078（792）3917

遊歩道の完成を祝う園児と住民の皆さん。ゆくゆくは、保育センターと公園を滑り台でつなぎ、遊べるようにしたいと構想を練ります。

映画紹介

あん

刑務所から出て来た千太郎が雇われ店長で働くどら焼き店に、年取った徳江がアルバイトを志願してきます。早朝からやってきて、小豆に語りかけながらゆでる徳江の作る「あん」の評判で、店は繁盛するようになります。

ところが、徳江の曲がった指からハンセン病の噂が広まり、客足が落ちてきます。千太郎と訳あり常連客の中学生・ワカナは、店に来なくなった徳江を療養所に訪ねます。2人は、元ハンセン病患者たちの過酷な歴史、生きざまを知ることとなります。患者を隔離する根拠となっていた法律がやっと廃止されても、療養所から出られない元患者たちのこと、世間の根深い誤解（思い込み）を知ります。

やる気のなさそうな（人生を投げたような）千太郎が、徳江と知り合い、元患者たちが、それでも自己を実現しながら生きてきた姿に励まされ、自身の人生を主体的に生き直そうと決意するまでが、見事に描かれています。

桜と屋台が効果的に登場してきます。

1月9日たつの赤とんぼ文化ホール、16日小野市民会館、2月24日姫路市民会館、3月2日明石市民会館、9日神戸文化ホールなどで上映会があります。

監督：河瀬直美
出演：樹木希林、永瀬正敏、内田伽羅、市原悦子。113分。

●お問い合わせ
兵庫県映画センター
078（331）6100

ハンセン病患者・回復者の人権

きずなトピック

シンガーソングライター
沢（さわ） 知恵（ともえ）さん

かかわらなければ

かかわらなければ／この愛しさを
知るすべはなかった（中略）ああ／何
億の人がいようとも／かかわらなけ
れば路傍の人／私の胸の泉に／枯れ
葉いちまいも／落としてはくれない

詩人、塔和子（とうかずこ）の代表作「胸の泉に」です。私はこの詩をブルースにしてうたっています。

生後6か月の赤ちゃんのとき、私は、塔和子さんの暮らす瀬戸内海の小さな島を初めて訪れました。ハンセン病の国立療養所大島青松園。父が学生時代ひと夏を過ごしたご縁です。1970年代はじめのこと。療養所で赤ちゃんを見ることは、ありえない時代でした。

特効薬プロミンによって、戦後日本でも全員完治したにもかかわらず、国の政策により隔離は続けられ、社会の差別・偏見も根強くありました。父は周囲の反対をふりきって、「大丈夫だから」と私を連れていったそうです。結婚しても子どもを持つことをゆるされなかった入所者のみなさんは、赤ちゃんが島に来たあの夏の日のことを、ずっとおぼえていてくださいました。

父が他界し、おとなになって再訪した1996（平成8）年は、らい予防法が廃止された年です。大島青松園のみなさんは、「知恵ちゃん、大きくなったね」と大粒の涙で歓迎してくださいました。私は圧倒され、以来、大島青松園は「故郷」になりました。2001（平成13）年から毎年コンサートもしています。

塔和子さんは、13歳で愛媛県の小さな漁村をあとにしました。かかわりを断たれた島で、絶望の淵に立たされ、自殺を試みたことも。やがて詩をつむぐことに希望の光を見出し、かかわりを求めて、ラジオに投稿するようになりました。「本質から湧く言葉」と称され、詩の世界でもっとも権威ある高見順賞を受賞した大詩人です。

かかわったが故に起こる／幸や不
幸を／積み重ねて大きくなり（中略）
生を綴る

2013（平成25）年に83歳で亡くなった塔さんは、生まれたときの名前で、故郷のお墓に帰りました。そして、私は高齢化で人数が減っていく大島青松園によりそいたい思いもあって、昨年千葉県から岡山県に移住し、かかわりを深めています。塔さん、ありがとう。

プロフィール

シンガーソングライター、ともえ基金代表。1971（昭和46）年生まれ。日本、韓国、アメリカで育ち、3歳からピアノを弾く。東京藝術大学楽理科卒業。〈かかわらなければ～塔和子をうたう〉他27枚のアルバムを発表。第40回日本レコード大賞アジア音楽賞受賞。災害被災地、少年院でボランティアコンサートをするかたわら、全国各地の学校や自治体で、人権コンサートを精力的に行っている。

平成27年度人権啓発ビデオ

『ここから歩き始める』が完成しました。

日本における平均寿命の大幅な伸びや少子化などを背景として、社会の高齢化が急速に進んでいます。それに伴い、認知症高齢者も大きな社会問題となっています。高齢者を家族や地域でどのように支えていくか、また、高齢者自身の意欲や能力をどのように生かしていくかを考えることは、これからの私たちの大きな課題です。

認知症の親を持つ主人公とその家族の中で繰り広げられる、介護をめぐる葛藤ときずなの紡ぎなおしを描くことで、高齢者が人間として誇りを持って生きていく上で大切なことについて、家族や地域の視点を通して考えます。

出　　演／金子昇、三輪ひとみ、平林智志、大出俊 ほか
企　　画／兵庫県、(公財)兵庫県人権啓発協会
企画協力／兵庫県教育委員会　制作／東映(株)

字幕副音声付/34分/活用ガイドあり

●貸し出しについて
(公財)兵庫県人権啓発協会 研修部　TEL 078(242)5355

●購入について
東映(株)関西営業推進室　TEL 06(6345)9026

イベントガイド

姫路市 企業人権教育 研修会	日時 1月28日(木) 15:00～17:00 場所 姫路市文化センター 小ホール ※山陽電車「手柄」駅から徒歩15分 演題「ホンネで語る部落問題」 ●講師 角岡 伸彦さん(フリーライター)	問い合わせ 姫路市人権啓発センター TEL 079(282)9801

インターネットで「人権文化をすすめる県民運動」の模様を配信中！　人権文化をすすめる　動画　検索

優秀作品

手をつなぐ　やさしい心　明るい町
(南あわじ市　井筒 かぐやさん)

つどいの場　心癒され　笑顔出る
(伊丹市　辻 貞子さん)

人権に関する川柳を募集します！

いずれかのテーマに当てはまる川柳を募集します。
優秀作品は「きずな」に掲載し、オリジナルクリアファイルをプレゼント。

募集テーマ　いのち、人権一般、子ども

応募方法　はがきか、ファクス、メールで受け付け。
郵便番号、住所、名前(ペンネームの場合も併記)、年齢を明記のうえ、ご応募ください。2月5日(金)締め切り。(応募は各テーマにつきお1人1点とします。)

インターネット上を含む未発表・未投稿の自作の作品に限ります。

応募先　(公財)兵庫県人権啓発協会　啓発・研究部(下記参照)

ハーフタイム half time

先日、私の住む地域で、自治会が主催するイベントがありました。清掃活動をしながら近くの山へハイキングに出かけ、その後公民館に集まってゲームや会食を楽しむというもの。体調に応じて、いつ参加しても良いという緩やかなイベントです。小さな集落ではありますが、高齢の方から乳児まで、ほとんどの家庭から参加がありました。

近くに住みながら顔を知らなかった人、長く話していなかった人、世代の違う人たちと過ごした時間は意外なほど楽しかったです。こういう積み重ねが、地域のつながりを強くしていくのだろうと思いました。

参加するまで億劫に感じることもありますが、一歩踏み出すことで新しいつながりができるのだと実感しました。

「きずな」の編集においては、人権を通したつながりづくりを意識していきたいと思います。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。　(小池)

「きずな」は、協会ホームページからもご覧になれます。

(公財)兵庫県人権啓発協会　〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15　県立のじぎく会館内
TEL 078(242)5355　FAX 078(242)5360　info@hyogo-jinken.or.jp
兵庫県人権啓発協会　検索

2016(平成28)年1月発行